

INTERVIEW

日本公認会計士協会東海会 久松 但会長

1960年4月23日生まれ、59歳。79年3月、静岡県立沼津東高校卒。83年3月、慶応大商学部卒。85年9月、公認会計士試験2次合格。同年10月、太田昭和監査法人(現Y新日本有限責任監査法人)東京事務所入所。89年3月、公認会計士登録。91年10月、久松但公認会計士事務所開設。



会社などの会計、監査の専門家として財務諸表の信頼性を確保し、公正な事業活動、投資家などの保護を図る公認会計士は、活発で公正な企業活動に欠かせない存在として昨今ますます重要度を増しています。今年6月、日本公認会計士協会東海会(愛知、岐阜、三重、静岡)の会長に就任された久松但さんに話を伺った。

——ご就任おめでとうございます。新会長として抱負をお聞かせください。

久松 日本会計士協会の本部は東京にあり、東海会は全国に16ある地域会の一つで会員は約2500。この地域は日本の中でも経済状況が良い地域。それだけに監査の必要性は高いです。

全体方針は本部で決めており、地域会はそれを現場に役立つように伝える役目。特に、中小監査法人や個人事務所は大手監査法人と比べて情報などのハンディがあり、東海会はそういった会員に対していろいろなサービス・手助けをするのも重要な役割です。

——東海会は「ハロー会計」の推進に最も熱心に取り組んでいます。

久松 「ハロー会計」は会計教育の一つで、小中学生に「会計とは何？」を伝える活動です。会計的知識を持ってほしいのと将来会計士を志してもらおう目的。例えば、ピザ屋さんでピザを作るのにいくらかかっていくらで売ったらいいか、などお店やさんになったつもりで考えてもらっています。

10年ほど前から当会で始めましたが、今では全国で行っています。

当会事務所(名古屋市市中村区・名駅前)で夏休みや春休みに開催したり、岐阜・三重・静岡でも開催していますが、それ以外に学校へ出張して開催したり、業界の説明なども行っています。

お金が関係すると必ず会計的知識は必要

で、それをゲーム感覚でチームごとに競い合って楽しく学んでもらいます。店主や経営者になったつもりで収支を考えてもらうのです。

理解しづらい会計というものを知ってもらう一助になっていると思います。

——この地域はモノづくりの中核圏とされています。業務への関連は？

久松 製造業中心ということは働く場が多くの人に提供され、会社の公共性は高い。監査においては、モノづくりの現場が見え、産業の発展ぶりに触れることができます。

一方で最近の新規上場会社に製造業は少ない。ソフト関係のIT企業が目立つ。この地域でIT関係の新規上場企業はあまりない。ただITは監査においては、製造業と異なりモノが見えないため判断が難しい面があります。

製造業は一時、海外へ出ていきましたが最近日本回帰しています。まだまだこの地域は発展の余地はあると思います。

——日産自動車のカルロス・ゴーン会長事件や東芝の粉飾決算など、このところ会計監査の信頼性を揺るがす問題が目立ちます。

久松 業界として注視しているのは監査の時間が短くなっている事です。例えば、3月決算が終わってから、決算発表までの期間が短い。会社としては業績を早く伝えて次の投資に向けてもらいたいが、一方で発表する決算を間違ったいけない。昔の決算は半期と年度末の2回の公表でした。今は四半期(3か月)に1回。会計士のお墨付きも必要。

現在は会社法と金融商品取引法に基づく決算書が2種類公表されています。それぞれ会計士がチェックしていますが、業界としては一元化の話が出ています。時間はかかるでしょうが、会社にとっても負担なので将来的には一元化へ向かうと考えています。

——グローバリズムの進行は止まりません。業界への影響や役割の変化は？

久松 会計士は会社の活動があつての仕事。会計士が勝手に海外へ出ていくわけではない。会社から求められているところに出ていく。企業活動には必ず会計が絡むので、公認会計士の活躍の場は世界中にあります。会計士の仕事は世界中で共通ですから。

むろん各国に公認会計士制度があり、現地の会計士がいますが、日本企業はやはり日本人の会計士が居てほしい。海外の場合、監査だけでなく、税法やコンサルティングなどの相談対応も求められます。

——IT化も加速し、最近ではAI化で会計士は不要になるのでは？とも言われています。

久松 会計士が不要になるといった話は、元帳と領収書をチェックする単純作業が減る可能性があるからでしょう。公認会計士のチェックは会社の管理体制などが根底にあります。製造・販売・購買など会社の業務に不正が生じないように内部組織体制になっているかのチェックもします。そういった部分は、AI化は難しいと考えます。

誰のために仕事をしているか、たとえば、投資家・株主のために決算書が正しくつくられているか、を証明する仕事。経営者の立場と一線を画して仕事するという誇りをすべての公認会計士は持っていると思います。

いろいろな会社に行っているいろいろな経営の仕方、考え方を見ると「どうしたら会社が良くなるか」を経営者になったような気分で考える事がよくあります。若い世代にもこういった会計士特有の経験ができることを伝えて、会計士にチャレンジしてもらいたいと思っています。